

子ども療養支援協会通信

Japanese Association for Child Care Support

Vol. 5

平成 25 年度子ども療養支援士養成コース開講

大阪府立母子保健総合医療センター ホスピタルプレイ士 後藤 真千子

平成 25 年 4 月 8 日、第 3 期生の子ども療養支援士養成コースが開講いたしました。石の上にも 3 年、平成 22 年の子ども療養支援協会設立以来養成コースも 3 回目となり、運営も軌道に乗ってきたように思います。本年度は 6 人の研修生を採用することが出来ました。順天堂医院と大阪府立母子保健総合医療センターを核に、今年は、北海道大学病院、静岡県立こども病院、大阪市立総合医療センターを加え、5 つの病院が関与し実習をします。5 つの病院が関与して、実習を行えるようになったため、研修生の採用を初年度の 4 人から順次 6 人に増やすことが出来ました。日本の病院に、当該職種の役割が定着し、実習受け入れが可能になるという事は、この職種が社会的に認識され、受け入れられ、根付き、広まっているという事です。この動きが続けばよりたくさんの研修生を受け入れ、より多くの子ども療養支援士を育成する事ができるようになります。実習を受け入れ可能な病院を 10、20 と増やし、日本中の小児医療施設に必要なだけの子ども療養支援士を供給できるようになることが、最終的な目標です。

同時に、教育については、当該職種の実務実践家と共に、様々な分野の専門家の諸先生方に講義を御願ひしています。今年度は、発達や実践技術関係を中心に講義時間を 1 週間増やしました。単に欧米からの移植ではなく、日本の医療環境に合うように我が国独自の教育を充実させ、高度化を図っていくためには、今後も改善を続けていかななくてはなりません。趣意書に掲げた子ども療養支援協会の設立目的を実現していくには、これら 2 つの課題への取り組みが絶対必要です。

本年度の研修生は、看護師 2 名、社会福祉士で施設や病院、保育所などでの仕事経験者 2 名、大学新卒 2 名とバラエティーに富んでいます。すでに前期の講義と実習を終えています。前期 2 週間の講義を終えて、実習に来たときには、「講義は大変だった。今までにないくらい勉強した」と言っていました。実習に 4 ヶ月従事し、後期の講義に臨む時にはまた新しい発見がたくさんあると思います。後期の実習では、講義で習ったことを実践の場で活かし、病院での日常的業務活動とすりあわせて身に付けて行き、一人前の子ども療養支援士になって行く事を期待しています。



平成 25 年 4 月 8 日 平成 25 年度開講式 (於: 順天堂大学)
(研修生・後列左から) 高橋、小野山、丸山、小松、大村、蛭田

平成 25 年度子ども療養支援士

養成コース研修生のご紹介

前期を振り返って

大村 えりか

「子ども療養支援士になる」という私の人生の 2 つ目の夢を叶えるために、子ども療養支援士研修生としての生活がスタートしてから 5 か月が経ちました。研修生として夢に向かっての第一歩を踏み出す期待に胸を躍らせていた初日が、つい昨日のこのように思い出される気もすれば、遠い昔のできごとのような気もしています。私にとって 4 月からの 5 か月間は大変中身の詰まった、充実した時間でした。

私がチャイルド・ライフ・スペシャリストという職業を知ったのは、看護学生 4 年生の時でした。その仕事内容や、子どもたちの CLS に見せる笑顔が忘れられないまま、看護師として小児科に勤務しました。私は看護師として働く中で、チャイルドライフの正しい知識と技術を身につけ現場で実践していく必要性を強く感じ、また活動の場を広げられる原動力になりたいという思いから今回のコースを受講させていただくことになりました。

6 月から本格的に始まった実習の中で「子どもがどう感じるのか」と子ども目線になることに徹すると、今まで見えなかったことや、考えもしなかった景色が見えてきたように感じています。研修生として初めて入院生活プレパレーションをしたお子さんは、プレイルームでたくさん遊んだ私のことを、とても信頼してくれて、退院の日には涙を流して別れを惜しんでくれました。遊びをきっかけに病院の中で子どもにとって特別な存在となり、信頼関係を結び子どもの心の支えとなれること、子どもに真摯に向き合うとその思いは子どもにしっかりと届くことを教えてもらいました。研修が始まったばかりの頃、私は無意識に「説明」という言葉をよく使っていました。プレパレーションは一方的に情報を提供するのではなく、プレパレーションの中で見せる子どもの反応を受け止めながら、会話のキャッチボールのようにお互いのやりとりの中で成立するものであり、一方的な「説明」ではなく、「コミュニケーション」であることも学びました。

前期の研修が始まってから、自信を無くしたり、落ち込むこともたくさんありました。そんな時、誰よりも私の気持ちを理解してくれたスーパーバイザーや、共に学ぶ研修生の仲間、そして屈託のない笑顔で毎日私を迎えてくれる病棟の子どもたちなどたくさんの方に支えられた 5 か月間でした。研修生として学べる幸せを噛みしめて毎日を大切にこれからも学びを深めていきたいと思っています。

遊びの力

小野山 晶菜

子ども療養支援士養成コースの受講生になるため、試験を受け続けて 3 年目。ようやく合格通知を手にした時は嬉しくて嬉しくてたまらない気持ちでした。いつも応援し、支えてくれた家族や友人、毎年快く推薦状を引き受けて背中を押して下さった上司などたくさんの人の支えを受けながら、やっと夢への一歩を進めることができました。

前期の講義では、様々な分野の先生方からのお話を伺い、1 日 6 時間の講義もあったという間で、勉強する事がこんなにも楽しいなんて知らなかったというくらい毎日が充実していました。同期の 5 人も、それぞれ今までの経験が異なり、自分とはまた違った視点を教えてもらったり、お互いの経験から感じる事を話し合ったりと刺激し合える仲間と出会うことができました。

2 週間の講義を終え、いよいよ実習のスタートが近づき、GW は千葉から大阪への引越して大忙しでした。初めての 1 人暮らしにやや心細さはありませんでしたが、大阪府立母子保健総合医療センターに足を踏み入れると、後藤さんをはじめ、ホスピタルプレイ室の皆様が温かい笑顔で迎えて下さり、緊張が和らいだのを覚えています。

前期では大阪府立母子保健総合医療センターで 3 ヶ月、大阪市立総合医療センターで 1 ヶ月の実習を行い、たくさんの子ども達に出会いました。病院に慣れていくうちに話しかけてくれる子もいれば、最初は表情が固く問いかけに答えるだけの子など様々でした。しかし、一緒に遊び始めるとだんだんと表情が明るくなっていく子ども達の様子に、遊びの力はすごいと感じました。もちろんただ遊ぶだけではなく、1 人ひとりの子どもに適した遊びを選ぶことで、子ども達が思い切り楽しめ、楽しかったと満足することが大切だと学びました。子ども療養支援士は子どもが遊びきったと感じられるようにじっくりと関われる個別遊びの提供や、同年代の子と一緒に関わり仲間になれるよう遊びのきっかけを提供したりと、個々の発達段階やニーズを考えながら接する事ができ、遊びをツールとして信頼関係を築き、あなたの事をちゃんと見ているよと伝える事ができる職種だと思います。後期ではプレパレーションやディストラクションなどにも積極的に取り組み、子ども達により深く寄り添ってサポートしていきたいと思っています。

多くの方の出会いから

小松 朋子

私が子ども療養支援士の選考にチャレンジすると決めた日から今日まで本当に多くの方のお力添えにより、今の私がいる事を忘れてはいけない日々感じております。

研修生になり 5 か月が過ぎ、沢山の方との素敵な出会いがありました。各病院や病棟で出会う病院関係者、子どもを含めた家族、研究会等でお会いした子ども療養支援士を応援して下さいの方々、お一人お一人との関わりが、私に刺激を与

え、充実した実習に結び付いてきています。特にスーパーバイザーの後藤さん、山地さんには日々の忙しい業務の中、多くの貴重な話をして頂き、現場でしか知り得ない学びも多く、感謝の気持ちでいっぱいです。そして、一緒に研修を進めているパートナーでもある小野山さんとは、共に学び共に感動する喜びを日々感じています。

実習初日、大阪府立母子保健総合医療センターに入った時は、病院について右も左も分からない私は、初めての場所に対する緊張感に「この先、大丈夫だろうか」と不安を感じたのも今では、遠い昔のようです。日々、皆さんの優しさに触れ、実習に行くのが楽しいと思える程、毎日を有意義に送らせて頂いています。

子どもたちとも時間を忘れるくらい沢山関わり、久しぶりのウノやランプに真剣になって遊び、子どもに「大人げない」「大人が真剣で面白い」と笑われた事もありました。遊びを通して子どもの目の色、表情が変わり、笑顔になる瞬間を目の当たりにし、遊びって素敵だなと私も癒されています。

病院環境にも少しずつ慣れ、自分の未熟さを痛感する中で、後期の実習ではより具体的な関わり、自分らしい実習を目指していきたいと思っています。

実習では多くの応援や励ましの言葉も頂き、支えて下さっている方々に恥じないよう、実習できる喜びを噛みしめて日々、感謝の気持ちを忘れず、人との出会いを大切にしたいと思います。この実習は人生において、私の財産とも言える貴重な体験をさせて頂いていると思います。協会の皆さまに心から感謝しています。本当にありがとうございます。今後ともどうぞよろしく願います。

前期を振り返って

高橋 優

子ども療養支援士養成コースが始まり、早くも前期研修が終了しました。昨年度の修了式にて先輩方の修了プロジェクトを拝見した時、学べることへの感謝と同時に、一年後自分もこんな風になれるのかと期待と不安を抱いたことを思い出します。様々な気持ちが渦巻く中で、五人の同期と出逢い、コースがスタートしました。前期の研修は、様々な専門分野の先生方が来て下さる集中講義から始まり、保育園での実習、順天堂病院わくわく広場での実習、北海道大学病院での実習に加えて、マンスリーセッションや第一回子ども療養支援研究会への参加など多くの学びの機会を頂きました。

前期実習の中で長い期間を占めたのは、三か月間の北海道大学病院での実習です。勤務するCLSのもと、遊びを中心とした支援の中で、実際に医療の現場で生活する子どもや親と出逢いました。5才の男の子K君は、術後で片足の踵をつくことができず、CLSの「明日一緒に遊ぼうね」という声かけに「ぼく、あるけない」と悲しそうに返事をしました。今まで出来ていたことが出来ないという現実、歩けないから遊ぶことも出来

ないと表情は暗く、術前のような活気は見えませんでした。その言葉を聞いたCLSは、歩けなくても遊べるということを伝えました。次の日K君は、椅子に座ったまま出来る遊びや、プレイルームで足を伸ばして座ったまま遊べるよう工夫し、様々なことをして遊びました。遊べることに伴い、足をつかないように自ら移動する術も身につけ、自信を取り戻している様子でした。笑顔を取り戻したK君は、後日「ぼく、車椅子でお出掛けできるんだよ」と教えてくれました。ふとした日常の一言の重みを感じ、遊びの持つ力、子どもの持つパワーを感じました。目の前の子どもの気持ちや考えを感じ、寄り添い、その子の思いに沿った支援を行うことが子どもの自主性の発揮や自信へ繋がることを実感しました。

コースが始まって以来、子ども療養支援士とはという問いを自らに問い続けてきました。講義や実習を通して、様々な人と出逢い、関わり、お話をする中で、少しずつではありますが、自分の中での子ども療養支援士像は明瞭になってきたように思います。後期の講義や実習を通して、目の前の子どもや家族に寄り添い、目の前の課題や疑問にじっくり一生懸命向き合い、より深い学びとなるよう日々を過ごしたいと思います。

前期を終えて

蛭田 悠子

初めまして。子ども療養支援士研修生の蛭田悠子と申します。養成コースが始まってから早くも5か月が経ちました。1月に合格通知を受け取ったとき、嬉しさと同時に本当にこのコースを受講できるかと思うと緊張と不安も入り混じり複雑な心境になったことを今でも鮮明に覚えています。

4月から研修が始まり、4月は講義、5月は保育園実習、6月から8月までの3か月間は北海道大学病院で実習をさせて頂きました。北海道大学病院のCLSは緩和ケア室に所属しています。そして、一般病棟に入院する子どもたちに対しての遊びを提供しています。決まった曜日に一定の時間、遊びを提供していますが、それとは別に個別の関わりも行っていました。こうした遊びの時間を通して子どもが自分を取り戻していく姿、子ども自身の力で心を整えていく様子を間近でみせていただき、改めて子どもが持っている力の大きさや強さを実感しています。子どもがリラックスして遊ぶことにより親も安心し、親子揃ってリラックスしている時間はとても穏やかで笑顔に溢れていました。こうして実習する中で子どもにとっての遊びの重要性を知識からだけでなく実感として得ることができました。

北海道大学病院のCLSは、子どもをもつがん患者さんのサロン「わかばカフェ」のファシリテーターもやっているため大人の患者さんとも関わっています。ここでは直接子どもに関わることはありませんが、子どもをよく知る親だからこそ知っている子どもが理解できる言葉使いなど非常に勉強になりました。また、わかばカフェの皆様の優しさに助けられることも多くありました。

前期の振り返ると書ききれないほど非常に多くの学びがあり、またとても多くの方々に支えられていることを実感しています。

最後になりましたが、一緒に遊んだ子どもたちとご両親、講義をしてくださった先生方、保育園の職員の方々、北海道大学病院の職員・ボランティアの方々、わかばカフェの皆様、そして、ご多忙のなか指導して下さるCLS、HPSの先生方に心から感謝の気持ちでいっぱいです。実習で子どもたちと遊んだ時間や実習を通して出会った方々は、私にとって宝物です。悩むことも多いですが、それ以上に子どもたちの笑顔に助けられています。後期の実習も1日1日を丁寧に、出合いを大切に、学びを深めていくことができたらと思います。どうぞよろしくお願ひ致します。

前期を終えて

丸山 里奈

今年の4月に講義が始まり、5月から順天堂医院で実習させて頂いて、あっという間に4か月が経ってしまいました。高校生の時にCLSを知ってからずっと目指してきたこの職種の勉強が出来る事を本当に嬉しく思うと同時に、実習中、何度も葛藤したり、落ち込んだりしながら毎日在必死に過ごしてきた気がします。

病棟での日々は1日1日が新鮮で、子ども達やご家族から様々なことを学ばせて頂きました。初めの頃は、スーパーバイザーであるCLSの動きをじっくり見て子どもとの距離感の取り方や、声掛けの仕方、ご家族への寄り添い方などを考えながら勉強をし、自分が実際に動く時に見ていくべき視点を得られました。しかし、いざ実際に子どもと関わるようになって、頭では分かっているけど行動に移せないもどかしさや、私がしている関わりが本当に子どもにとって支えになっているのだろうかという不安に何度も襲われ、くじけそうになったこともあります。そのような中でも、もう一度頑張ろうと思わせてくれたのは、病棟の子ども達でした。特にプリパレーションをするようになってからは、少しだけ力になれたかなと感じることが増えていったように思います。

初めてプリパレーションした5歳の男の子、成長ホルモンの負荷試験での入院でした。プリパレーション前に遊びで関係を作ってから実施し、その日の夕方に点滴挿入があったため、その直前にも遊びで関わっていました。プレイルームに先生が呼びに来た時、彼は「はいはい！ さっきの(プリパレーションの内容)と一緒にだね？ 行ってきまーす」と元気に処置室に向かい、少しだけ泣いたものの「出来たよ！ シャキーン！」とルートを取った手を見せてくれました。採血時にはディストラクションで入りましたが、嫌がりながらも、持って行ったおもちゃを「守り神」と呼び共に乗り越え、帰る時には何度も手を振って笑顔を見せてくれた彼との出会いは、私を成長させてくれました。そして、継続して関わっていくことの大切さをスーパーバイザーに何度も教わってきて、自分自身で経験して初めてそのことを深く理解できた出来事でもありました。

その他にも様々なケースに接し、挙げたらキリがない程の学びや学びを得た濃密な4か月を過ごせたと今になっては思う

ことが出来ます。この先まだ実習は続きますが、後期にはより一層自立していけるよう、一瞬一瞬を大切に努力を重ねていきたいと思っています。

第1回日本子ども療養支援研究会

開催報告

開催報告

第1回日本子ども療養支援研究会 会長 藤村 正哲

第1回日本子ども療養支援研究会は、2013年6月29日(土)・30日(日)に大阪市立弁天町市民学習センター講堂で開催されました。会員はじめ関係者のコミュニケーションの貴重な機会となりました。初めての研究会開催にあたりましては、皆様のご協力により大きな成果を挙げていただき、厚くお礼申し上げます。

今回の研究会の目的は

- ① 会員自身の協会行事への主体的参加と連帯意識の向上
- ② 会員の研究発表機会の提供
- ③ 社会、メディアへの広報
- ④ 学術的水準の向上

であり、研究会のメインテーマは「すべての小児病棟に子ども療養支援士を！」、スローガンは「採血の前には、子どもにプレパレーションしましょう！」でした。

会場の都合で、インターネットによる参加申込み先着順で120名としました。

一般演題は公募で、採否はプログラム委員会で決定し、発表は口演としました。会員であること、1000字以内の抄録を1か月前までに研究会E-mail addressに添付ファイルで送ることとしました。

参加費は3000円(会員)、4000円(非会員)、懇親会は実費2500円としました。

研究会参加者数は113名で、近畿46%、東日本40%(うち北海道・東北3%)、西日本13%で、全国から参加いただきました。45名の方は懇親会にも参加いただきました。

一般演題は12題、教育講演2題、シンポジウム2課題でした。

教育講演(Ⅰ)子どもの心身症とその対応(石崎優子 関西医大小児科・医師)

教育講演(Ⅱ)今求められる疼痛管理(多田羅竜平 大阪市立総合医療センター・医師)

シンポジウムⅠ「すべての小児病棟に子ども療養支援士を！」
シンポジウムⅡ「子どもへのプレパレーション」

研究会の開催は6月29日の午後6時台と8時台の時間帯でNHKニュースに報道され、テロップでも「子ども療養支援協会」と明示されていました。

今回の研究会は、大阪府立母子保健総合医療センター・ホスピタルプレイ室が事務局を担当しました。少人数組織で準備を行い皆様にご無理をお願いしました。ご協力いただきました皆様に厚くお礼申し上げます。

シンポジウムⅠのまとめ

宮城県立こども病院・医師 林 富
北海道大緩和ケアセンター・CLS 藤井 あけみ

本邦では、CLS、HPS合わせて30数名と、欧米と比較してごく少数である。療養環境整備のためには子ども療養支援士（CCS）の果たす役割は大きく同時に保育士などの連携も重要である。シンポジウム「すべての小児病棟に子ども療養支援士を！」は現状を理解し対策を話し合う大変良い機会となった。

田中恭子氏は小児科医の立場で、「小児療養環境の実態調査から」と題して、アンケート調査の結果を分析し、特に、子どもの権利を保障することの重要性と、子どもの遊びを保障する保育士と子どもの意思表明を支援するスタッフ（子ども療養支援士等）の配置が重要であることを強調した。

松井基子氏は「小児病棟における子どもの現状」と題して、茨城県立こども病院 CLS の経験から、マンパワー不足の解決、子どもの発達や心理社会的な視点を持つ専門家が適当な割合で配置されることが不可欠であること、思春期以降の対応についての重要性について報告した。

國本依伸氏は弁護士立場から、カリフォルニア州内の病院、パリアティブケア施設を訪問し面会制限は存在しないこと、処置や検査時の親子分離も基本的に行われていないことなどを報告し、近時はファミリーセンタードケアという概念によって説明されていることなどを「米国における子どもの療養環境」と題して報告した。

窪田昭男氏は大阪府立母子保健総合医療センター小児外科医の経験から、「医師の立場から」と題して、青少年の療養環境整備の重要性について報告した。本邦で青少年ルームが設置されている施設は少数であり、重要な提言であった。

シンポジウムⅡのまとめ

順天堂大学小児科 医師 細澤麻里子

「子どもへのプレバレーション」というタイトルで座長に鈴木敦子氏、田中恭子氏、シンポジストには早田典子氏、桑原和代氏、山地理恵氏、後藤真千子氏、門田和子氏（発表順）の5名の先生方にそれぞれの施設で行われているプレバレーションについてご紹介いただきながらプレバレーションの役割や今後の課題についてご講演いただいた。今回のシンポジウムを通して、プレバレーションは限られた患児や体験を対象としているのではなく広く行われうるものであること、またその実現にはプレバ

レーションを日常の診療業務の中にどう体系的に位置付けていくかが重要であること、効果的なプレバレーションを行うには多職種連携が重要であり、職種間の役割分担も今後の課題の一つであることが提言され大変有意義なシンポジウムであった。

教育委員より活動報告

マンスリーセッション

子ども療養支援協会教育委員
済生会横浜市東部病院こどもセンター・CLS 井上 絵未

今年度のマンスリーセッションは、2つの目的をもって内容を設定しています。1つ目の目的は、講義で得た知識と実習で得た経験を結びつける場となること。2つ目は、受講生のプレゼンテーションとディスカッション力をつける場となることです。

この目的のために、各セッションで受講生に発表を行なってもらうことにしました。各受講生が乳児期、幼児期、学童期、思春期の発達段階から1つを選択し、その発達段階の特徴（入院中のニーズ、子どもが抱く誤解や思い、専門職として必要なアセスメント項目、接し方と言葉遣い）について言及し、独自に疾患や状況を設定した架空のケースに基づいてどう具体的にどう介入するかを発表の課題としています。

8月3日（土）に行われた今年度第2回目のマンスリーセッションからこの発表を開始し、丸山さんが乳児期、小野山さんと高橋さんが思春期について発表しました。発表は、受講生が将来、学会発表や講演を行う場を想定して設定時間（15分）内で発表を終了するようストップウォッチで時間を計測しながら行なっています。発表後には、医療現場でのカンファレンスなどで専門職として自分の考えをきちんと伝えられる力を養うために、発表の内容について受講生とアドバイザーがディスカッションを行なう場を設けています。

乳児期の発表に対しては、微細運動・粗大運動を含めた発達支援、生活リズムの構築、母子の愛着形成のサポート、看護師や保育士との連携という内容で他の受講生やアドバイザーから活発に意見が交わされました。思春期の発表では、受講生同士では思春期同士の仲間作りを医療現場でどのように進めていくか、幼少期からの慢性疾患の子どもをいかに発達段階相応に地域の中でフォローしていくのかという話題で議論が交わされました。アドバイザーからは思春期の治療に対する意思決定のサポートや思春期特有のアセスメント項目についての問題提起がなされました。自分で調べて発表するだけでなく、様々な視点からのディスカッションを経ることで、発表する側・聴く側ともに発表内容がより深まったのではないのでしょうか。

活動報告

なにかわくわくするようなことを

長野県立こども病院
認定チャイルド・ライフ・スペシャリスト(CCLS) 塩崎 暁子

長野県立こども病院のCLSとして始動し始めて1年が経ち、たくさんの患者さんやご家族、チームの仲間との出会いがありました。「新しいものを創るのって楽しいわよ。」「やりたいことを見つけなさい。」と周囲の温かさや子どもたちの笑顔に支えられながら、手探りで一步一步進んできた宝物のような日々。脳神経外科、血液腫瘍科、小児外科、ICUなど外来・病棟問わず依頼をいただく診療科も少しずつ増え、それぞれの場所や場面で求められるCLSの役割と子どもと家族のニーズについて考えながら活動してきました。

術前の関わりの中、看護師とCLSと向かったオペ室見学で「手や足が暴れると気持ちが悪くなる。でも年長さんだからそんなくない。」と打ち明けてくれた5歳の子がいました。別のケースでは、がんが再発した3歳の子へ医師、看護師、CLSで協働し化学療法のプレバレーションを行ないました。それぞれが本来の役割を担い、時に補い合いながら協働したケアの実践ができてと感じています。このような個別化した心理社会的支援の取り組みの積み重ねが、より子どもと家族が安心できる療養環境作りの一環として広がりつつあるのではないかと感じています。

一方で、病気とともに生きる子ども達を取り巻く環境の困難さは、医療施設にとどまらず、在宅や学校に及び想像以上に厳しいことも知りました。しかしそのような中で、子ども達が言葉にならない思いを紡ぎだすのは、楽しい時間を過ごし、なにかわくわくするようなことを想像した後だったような気がするのです。病気の進行で話すことも体の自由もさなくなってきた女の子は、ある日、大好きなウノで遊んでいた時、ゲームの終盤で大きくはつきりした声で「ウノ！」と言ってカードを見せ、ほっとしたような満足げな顔で笑いました。お母さんの嬉しそうな声は忘れられません。きょうだい同士がライバルとして卓球を頑張っていた高校生の子は、弟の命について先生から告知を受けた後、受け入れがたい状況の中で散歩した中庭で「もしも明日、できることがあったら一緒に卓球がしたい」と泣き笑いました。CLSとして様々な場面に立ち会い、子ども達からの学びは数知れません。病気とともに生きること、病気のきょうだいを持つこと、その中で育まれる優しさ、言葉にならない怒りや戸惑い、精一杯生きること……一人ひとりが教えてくれたことを受け止め、その子の持つ力を引き出していけるCLSでありたいと思います。

チームに役立つ子ども療養支援士になるために

東京大学医学部附属病院
子ども療養支援士 割田 洋子

当院は、病床数約1200床あり、外来には1日平均約3000人の患者が訪れます。そのうち小児医療センターは約100床ありますが、子どもたちは、センター内だけでなく、外来、検査部、治療部、手術部などあらゆる部署で医療を受けています。

4月から私は、小児看護専門看護師(CNS)と一緒にチームを作り活動しています。子ども療養支援士として自分にできることは何か、その役割を見つけていく為に、働き初めの頃は、様々な部署の見学をしました。日頃、スタッフの方々はどのような活動をしていてどんなことに困っているのか、子どもたちは検査や治療をどのような環境でどんな風に受けているのか、子どもたちはこれから自分の身に起こることをどのように説明されどのよう受け止めていてそして検査や治療を受ける前や受けた後をどのような気持ちで過ごしているのか等、各部署のスタッフの活動、子どもの様子などの実態を知ることから始めました。このような見学を通して、子どもたちが入院から退院そして退院後も含めた医療で受ける一連の体験を、スタッフ側と子どもや家族側の両側面から知り、その中で今必要とされていることや、自分に出来ることは何かを明らかにしていきました。

まず、各部署の見学を通してわかったことは、色々な職種のスタッフが、子どもたちのケアに、様々な工夫や努力をされていたことでした。子どもが楽しく検査を受けられるように、TVに出てくるヒーローのお面をつけて登場する医師や、治療に来た子どもに好きなキャラクターを聞き、その場で絵を描いてご褒美に渡す技師さん、手術室の話をしに毎日病棟に来てくれる手術部の看護師さんたち、そして小児科の病棟ではプレバレーションやディストラクションの充実を今年度の活動目標に挙げスタッフ一人ひとりが積極的に取り組んでいました。このように、スタッフの方々の子どもの権利に対する意識や関心は非常に高く、子ども中心の優しい医療を提供するためにできることを一生懸命考え行っていました。

子どもと家族の様子を、いつも近くで見ているのは現場にいる部署のスタッフの方々だと思います。病院中の出来るだけ多くの子どもたちが、さらに安心した中で医療を受けることができる為には、各部署のスタッフ一人ひとりの力が本当に大切だと改めて感じています。私は、スタッフの方々が行っている活動や子どもの為に「やりたい」と思っているやりがいを奪うのではなく、これまで築きあげてきた活動をいかに尊重しながら、さらに各部署のチーム力を上げて行くために自分の出来ることは何かを考えながら4月から半年間活動をしてきました。各部署の困っている問題を知り、その問題を協働しながら解決していく、その活動の積み重ねにより、最近では子ども療養支援士に任される仕事も増えてきました。

子ども療養支援士だからこそできる役割、それは子どもたち

の代弁者として、いつも子どもの視点で医療を捉えアセスメントできることだと思います。今後も、出来るだけ多くの子どもたちに優しい医療環境を提供していくために、また、チームに役立つ子ども療養支援士になるために、このような自分の役割を活かしながら活動を広げていきたいと思っています。

関連ボランティア活動の紹介

成育チクチク広場活動報告

チクチク広場スタッフ 高橋 則子

国立成育医療研究センター内の「おもちゃライブラリー」では、2008年5月から活動スタッフ向けに支援グッズのバクバクちゃん人形の制作講習会を始めました。

同じ頃、ライブラリーに遊びに来るお母さん達から、入院や障がいのあるお子さん達の洋服のリフォームや制作の相談を受け、講習会を改め「成育チクチク広場」としてスタートしました。月1回第二火曜日午前10時から午後3時まで、お子さんが通院・入院しているお母さん達(現在登録メンバー20名)と託児付きで、手作りおもちゃやお裁縫・編み物、時にはおしゃべりに花が咲き楽しい時間を過ごしています。

また、昨年12月よりNICUの看護師さんからの熱い要望で、入院しているお子さん達のお母さん向けの広場も始まり、ベッドサイドに持ち込み可能なおもちゃの制作など、月2回1時間ずつですが喜んでいただいています。

現在はライブラリー以外の「順天堂小児科血液グループ親の会」や「中川の郷療育センター」、「光明特別支援学校」などで年1~2回開催しています。ご参加の皆さんと一緒にチクチクをすることで、作る楽しさや出来上がった時の達成感、そして交流の場となり和やかな時間が、お子さん達の嬉しそうな様子につながっていきます。

病児のお母さん支援として活動を広げてきました。喜んでいただけることが、私達スタッフの継続の支えになっています。

広場では、針、ハサミを使用しますが安全面には細心の注意を払い、「楽しく安全なチクチク広場」をこれからも目指していきたいと思っています。



子どもの広場

子どもたちの作文や作品を掲載するコーナーを設けました。子ども自身が作る文章、そして描き出す作品には、ハッとさせられるような気付きや思い、そして力強さが在ります。このコーナーでは、そんな子ども達の想いや願いをご紹介するためのコーナーです。今回は、小幡尚央君(小学校6年生)です。周りのみんなを楽しませるのが大好きな尚央君、紙芝居を描いてお友達に読み聞かせをすることもあるそうです。そんな尚央君から皆様へのメッセージをお送りします。

将来の夢

小幡 尚央

ぼくは、飼育員になりたいです。

理由は動物が好きだからです。

苦手な動物もいっぱいあるけど目をじっと見ると仲間のよう感じるかもしれません。

ぼくが一番好きな動物は「ゾウ」です。

なぜ「ゾウ」が好きになった理由は「千葉県市原市 市原ゾウの国」でゾウが好きになったということです。

ぼくが、飼育員の面接をやるのはむずかしいけど飼育員になれるようにがんばりたいです。



お母様からのひとこと

吹奏楽部でトロンボーンを選んだのも、音色がぞうの鳴き声に似ていたからです。

何度も、くじけそうになりましたがトロンボーンが好きで今年で3年目になりました。色々なやりたいことのなかに飼育員はいつも入っています。

事務局からのお知らせ

● 年会費の納入のお願い

平成24・25年度会費(3,000円/年)未納の会員の方は下記口座までご入金の際、宜しくお申し込み申し上げます。
振込先:みずほ銀行 本郷支店 「普通」2813671 子ども療養支援協会

● 今後の予定

・ 子ども療養支援協会の行事

平成25年11月21日(木)	平成26年度子ども療養支援士養成コース 受講生募集開始(平成25年12月20日まで)	
平成26年1月	平成26年度子ども療養支援研修生選考	
平成26年3月15日(土)	研修修了式	東京(予定)

● 第2回日本子ども療養支援研究会開催

第2回日本子ども療養支援研究会は平成26年6月7日と8日に、東京にて開催予定です。

研究会では特別講演、ワークショップ、一般口演を予定しております。詳しくは順次協会ホームページ(<http://kodomoryoyoshien.jp/>)に掲載して参りますので、皆様奮ってご参加ください。

また、演題も募集しますので、皆様方の素晴らしい活動をぜひこの研究会でご発表ください。共に学ぼう機会になればと思います。

● 平成26年度子ども療養支援士養成コース受講生募集について

願書受付期間:平成25年11月21日(木)から平成25年12月20日(金)午後5時まで

子どもが好きで意欲のある方、フロンティア精神をお持ちで協調性のある方などの応募を期待しております。

詳しくは協会ホームページ(<http://kodomoryoyoshien.jp/>)をご覧ください。

編集後記

今年は6月に第1回の日本子ども療養支援研究会を大阪にて開催することができました。施設や職種を超えて多くの方々にご参加、ご発表いただき、熱心な討論が繰り広げられましたこと、とても嬉しくまた心強く感じました。ご参加くださった皆様、また準備にご尽力いただきました皆様にこの場を借りて深くお礼を申し上げます。さて、来年の研究会は東京での開催となります。子ども療養支援に関連する日頃のことから今後の展望まで、皆様と広く意見交換できるような場が出来ればと考えております。ぜひご参加ください。

子ども療養支援協会事務局

〒113-8421 東京都文京区本郷2-1-1 小児科研究室内

Tel: 03-3813-3111 / fax: 03-5800-0216

e-mail: kodomoryoyoshien@yahoo.co.jp